

「方丈記」と「発心集」

高橋 貢

「方丈記」の文学史的意義

「方丈記」は随筆文学の一作品として扱われているが、佐々木八郎博士（「方丈記私論」国文学研究、昭和三十七年三月。日本文学研究資料叢書所収）等の御指摘のように、「枕草子」「徒然草」と違って整然とした評論的性格を持つ所に一性格がある。私は諸氏が気づいておられながらも、あまり明言していない「方丈記」（以下、本記と略称）の文学史的意義の一つに、長明が体験した都の災害を意識的、かつ組織的にとり上げて活写し、後世に伝えたことにあると思う。

周知の通り、本記前半に長明前半生の特に二十代から三十歳にかけて体験した、安元三年（一一七七）から元暦二年（一一八五）にかけての災害をとり上げる。中世の諸作品をみると「平家物語」にしても日蓮の「立正安国論」にしても、都や地方の災害をとり上げ、あるいは注目する。「方丈記」はそれらの作品に先行して災害をとり上げる。一方中古の作品についてみると、「日本靈異記」

「今昔物語集」には説話の中で洪水、大風等の災害が扱われているが、他の作品の場合、災害を正面からとり上げ、扱うことはほとんどない。本記が手本にしたという「池亭記」にしても、西京の荒廢の様子については記すが、災害は扱わない。女房の日記文学作品は盗賊の難や恐怖については記すが、他の大災害については記さない。

中古文学の諸作品で扱わなかった大火・辻風・飢饉・流行病・大地震という災害と被害、人心の動搖を長明が見つめ、目をそむけることなく活写したところに、中古の作品にない特色がある。また貴族の立場からではあるが、民衆や地方の生活に言及する（なおこれまでの諸説をみると都の災害について論じられながら以上述べたような文学史的意義にまではあまり言及されていないように思う）。

長明のこの目はどこから学んだのかという点、とりあえず三点考えられるように思う。一、末法意識の影響、二、「往生要集」の影響、三、和歌愛好家、あるいは教奇者としての目である。

一、末法意識については、周知の通り平安時代後期から鎌倉時代にかけて末法意識が政治、思想、宗教、文学等各界の人々に影響を

与えた。長明にもこの影響がある。本記に「世の乱るる瑞相」「濁悪世」とあり、「発心集」を見ると「濁れる世の末」(巻二第七)、「濁れる末の世の衆生」(巻二第十)等、所々にその影響と思われる表現がある。長明が都の災害に注目したのは末法観の影響による危機意識を当時の人々と共に長明が持っていたからとみてよいであろう。二、先輩の今成元昭氏(「蓮胤方丈記の論」文学、昭和四十九年二月、等)は「方丈記」の思想、構成、及び都の災害の記述に維摩経からの影響が強いと述べられた。維摩経からの影響と共に私は「往生要集」の影響も無視し得ないと思う。長明は辻風の激しさを地獄の業の風にたとえる。地獄の悪風、業風については「往生要集」(黒繩地獄、焦熱地獄、大焦熱地獄。大焦熱地獄に「一切の風の中には業風を第一とす。」とある)にも記事があるが、また八大地獄で受ける様々な苦を逐一記している。この地獄の諸相に示唆を受け、二十代に直接見聞し、体験した都の災害を書き記したのが本記前半の記事ではなからうか。「往生要集」は本記や「発心集」にくり返し引用するように、長明にとって座右の書であった。―ただし周知のように、長明は直接体験した災害だけをとり上げたために、源平争乱という歴史的事件をとり上げない。このような所に視野の狭さは詭後感として残る。あるいは「明月記」で源平の争いを貴族の世界以外の出来事としているが、これと同じ立場であったのかも知れない(他の理由も考えられるが、それについては後述する)。三、治承四年の都遷りの記事では、長明自身福原に下って新都の有様を觀察している。故事を引用し、対句を駆使するが、実証、体験に基づいているので、味わいがある一方、説得力がある。

他の災害の記事も体験に基づいているので、簡潔な表現ではあるが迫力がある。このような実証、体験を尊重する態度は「無名抄」で扱う和歌愛好家の態度と共通する。例えば、ますほの薄の意味を知っている聖がいると聞くと、すぐに雨の中を渡辺に出掛けた登蓮法師を「いみじかりけるすき者」と評しているし、貫之の家や業平の家跡を記し、証歌を大切にす。『方丈記』でも蟬丸の旧跡や猿丸大夫の墓を尋ねている。このようにしてみると、都の災害をとり上げ、簡潔な表現でありながらいきいきと記している態度、方法に、長明が過去に学び、体得した様々な方法や人生経験が集約され、活かされていることがわかる。

二

「発心集」にみられる世相

安居院の聖が都に出る途中、大路に面した井戸の側で身分の低い尼が物を洗っていた。聖を見て尼が一人の老僧を引き合わせた。僧は聖に「後世の善知識になる人に家を譲りたい。隣が檢非違使で、罪人を拷問にける音がしてうるさいので移りたかったが、長生きできない身だからと我慢していた。」という。聖は僧の死ぬ時に世話してやり、その後、家を尼に譲った。

この話は「発心集」巻二第一「安居院聖、京中に行く時、隱居の僧に値ふ事」の話の要旨である。話の主人公でもなく、主題とも関りはないが、話中に低い身分の尼の生活の様子や檢非違使が罪人を拷問にける場面を出す。場末の匂いにする所を場面にとり上げるが、このようなことは中古文学の作品には少ない。

長明は源平の争乱のような歴史的事件をとり上げることがしなかったが、目前の世相、肌で感じる巷の事件に関心があつた。このことは「方丈記」の場合でもいえるが、「発心集」（以下、本集と略称）にも通用する。本集には都の災害を大々的にとり上げることがしがないが、次のように世相や巷の事件をとり上げる。

路傍に伏せる卑しい身分の病人（巻四第四「叙実、路頭の病者を憐れむ事」、続本朝往生伝等に同話がある）、武蔵国入間川の洪水（巻四第九「武州入間河沈水の事」、戸外に棄てておかれる死骸の様子（巻第五第一「唐房法橋、発心の事」、戦乱で捕えられた人が追い立てられて行く様子（巻六第十二「乞児、物語の事」）等。また乞食の老尼（巻六第十一「乞者の尼、単衣を得て寺に奉加する事」、武士、ばくち打ち、田楽・猿楽者（巻八第七「或る武士の母、子を怨み、頓死の事」、兵衛尉、檢非違使（巻八第十二「前兵衛尉、遁世往生の事」）等、様々の地位や職業に従事する人が登場する。

長明が貴族や僧侶だけでなく、低い身分の人々に対して関心を持ったことには、仏教の影響があつたことは否めない。仏教教理の中に「一切衆生、悉有仏性」とあり、人間はもとより、動植物から無生物にいたるまですべてが仏性を有するという平等の原則があつた。日本仏教の先達者行基は橋をかけ、道路を作り、池を掘り、民衆に仏教を布教した。また「日本靈異記」「今昔物語集」等説話集で民間人を取り上げるが、説話の伝承者や編集者の多くが仏教関係者であつたことと関係があろう。本集巻八第七「或る武士の母、子を怨み、頓死の事」に「阿弥陀仏の悲願はなほざりなる事かは。

「方丈記」と「発心集」

諸仏の捨て給へる五逆の悪人をも助けんと誓ひ給へれば、昔も今も、智あるも智なきも、貴賤道俗老少男女をえらばず、往生するためし、耳に満ち、眼にさへぎれり。」とあるので、長明が仏教、特に、貴賤道俗老少男女を差別せぬ弥陀の思想に影響を受けたことは考えられる。

三

長明の限界

長明は民衆の生活や巷の事件に関心を持ち、「方丈記」「発心集」でとり上げた。特に「方丈記」では意識的、組織的に都の災害を記した。このところに従来の作品にない特色の一つがある。それではもう一步踏みこんで人間のもっとも汚い部分―糞尿、血汗等に目をそむけることがなかったかという点、これらの部分への踏みこみまでは及ばなかった。

以前「今昔物語集」「宇治拾遺物語」に視点をあてて述べたことがあるが（「恥部・汚物直視の文学」古典遺産 昭和五十三年十月）、増賀上人遁世の話を例に上げて私の考えを述べてみたい。「発心集」巻一第五「多武峯僧賀上人、遁世往生の事」は、増賀が名利をいとうあまりに物狂いの振舞をした幾つかの話を掲載する―内論義の後に庭に捨てられた食物を乞食と共に食べる話、師の慈恵僧正慶賀の日に、乾鮭を腰にさし、牝牛に乗って参加した話等―。その中に後の宮の戒師として召された時、見苦しいことを言って退出した話がある（其の後、貴き聞こえありて、時の後の宮の戒師に召しければ、なまじひに参りて、南殿の高欄のきはに寄りて、さまざま

に見苦しき事どもを云ひかけて、空しく出でぬ。この話は元来「大日本法華経験記」巻下第八十二、「統本朝往生伝」第十二にあつて、「国母の女院敬ひ請じて師となすに、女房の中にして、禁忌の危言を発して、然もまた罷り出でぬ。」(法華験記)、(當后宮授戒の請あり。参入の後、御前において見(奥の誤りか)風を示せり。)(統本朝往生伝)と記す。「法華験記」「往生伝」によると宮中で言つてはならないことを言つたという。「発心集」では「禁忌の危言」が「見苦しき事」になつてゐる。「法華験記」でも増賀が具体的に何を言つたのかわからないのに、「発心集」ではさらに内容がぼやかされてゐる。品よく記すが、反骨性を示す増賀像の浮き彫りが浅い。

一方、この話は、「今昔物語集」巻十九第十八「三条大皇太后宮出家語」、「宇治拾遺物語」第一四三(巻十二第七)「増賀上人三条宮に参り振舞事」にあり、「法華験記」系統の話に比べるとはるかに具体的でこまかく、増賀の反骨性、奇行ぶりをいき／＼と伝える。「今昔」の話に即して左に要旨を記す。

三条の関白太政大臣の娘三条の大皇太后宮は老年になつて出家を望み、戒師として増賀聖人を召した。聖人は宮の髪にはさみを入れて出家の作法が終つた時、急に「増賀ヲシモ召シテカク扱マシメ給フハ何ナル事ゾ。更ニ心得侍ラズ。若シ乱リ穢キ物ノ大キナル事ヲ聞コシ食シタルニヤ。現ニ人ヨリモ大キニ侍レドモ、今ハ練絹ノ様ニ乱タト罷リ成リニタル物ヲ。若キ上ハケシウハ侍ラザリシ物ヲ。糸口惜シ。」と叫んだ。同席の女房達や僧俗は驚き、齒から汗を流す思ひであつた。増賀は、宮が自分を召したのは自分の一物が大

きいと知つて興味をもつたからだろうと言つたわけである。——次に退出する時、西の対屋の簀子に坐りこんで尻をまくり、水のような下痢をした。汚い音は宮の居場所にまで聞こえた。

この話の特色は増賀が權威に対してへつらわず奇行な振舞を書いていることである。「法華験記」系統の話でも増賀が反骨性をもつた聖人であることはわかる。しかしこれだけでは具体的にどういふことかわからない。品よくさら／＼と書き流した点は「法華験記」系統の方がよいが、具体性といい、迫力の点からいうと格段の違いがある。

ところで長明は増賀の奇行ぶりをいき／＼と伝える「今昔」系統の話を採用しないが、それはなぜであろうか。一つには「今昔」系統の話が長明の耳に入つて来なかつたことが考えられる。しかしたゞえ入つていたとしてもはたして修正しないでそのまま採用したかどうか疑問である。前述したように「法華験記」系統の話を採用した場合も表現を品よくし、柔らげている。このことは長明が現実生活に絶望して隠遁生活に入つたものの、伝統的な和歌の世界や貴族的な考え方から脱しることができなかったことと関連があろう。長明は日野に住んでから音楽を楽しみ、自然を友として過す。この感慨を「方丈記」に「人の友とあるものは、富めるをたふとみ、ねむごころなるを先とする。必ずしも、なさけあると、すなほなるとをば愛せず。ただ糸竹・花月を友とせんにはしからじ。」と記す。この一文によると長明の友とした自然は花月、即ち伝統的な美的な自然である。「発心集」巻七第五「太子の御墓覚能上人、管絃を好む事」にも、音楽を好む聖の往生話や風月に心を染めた博士が善知識

のすすめで極楽の様に浮かべて往生した話を掲載する。前者には「管絃も、浄土の業と信ずる人の為には、往生の業となれり。」と評している。

「源家長日記」によると、長明が出家後、後鳥羽院より長明の持っていた手習という琵琶をたずねてみよと仰せがあった。家長が問うと、長明は歌を献じた。院の仰せで家長が返歌をすると、やせ衰えた長明は家長をおとずれて朝恩を謝して涙を流し、俗世間を捨てきれない邪魔物はこれです（うき世を思ひすてず、すこしのほだしにもこれが侍）と言って、返歌を書いた琵琶の撥を見せたという。これらの例からすると、長明は出家後も歌や教奇、貴族的な立場を捨てていくことはできなかったとみてよい。

右に関連してもう一話例を上げる。「発心集」卷三第四「讚州源大夫、俄に発心・往生の事」は、殺生を業としていた悪人、源大夫が講師の説法を聞くや、その場で頭を剃らせて法師となり、念仏となえて西に向かった。西の海の見える所で阿弥陀仏の名を呼ぶと、海の彼方で返事があった。数日後源大夫は同じ場所へ往生した話である。同話は「今昔物語集」卷十九第十四「讚岐国多度郡五位聞法即出語」等にあるが、特に「今昔」は話がこまかく具体的に「あるばかりでなく、素朴で野性的、行動的な人柄をいき／＼と描く。例えば源大夫が西に向かつて歩きながら「今昔」では金鼓を胸にかけて叩きながら「阿弥陀仏ヨヤ、ヨイ／＼」と大声でとなえ続ける。この部分には無知文盲で粗野でありながら純朴で行動的な人間像が描き出されている。同部分を「発心集」は「衣・袈裟乞ひて、うち着て、是より西さまに向きて、声のある限り「南無阿弥陀

「方丈記」と「発心集」

仏」と申して行く。」と記す。この一文からでも源大夫が行動力のある人物であることはわかるが、「南無阿弥陀仏」と申して行くのでは、きれいではあるが、整い過ぎてしまつて、野性味のある人物像は出ていない。「阿弥陀仏ヨヤ、ヨイ／＼」だからこそ源大夫が活きて来る。この違いについて益田勝実氏（「説話文学と絵巻」二三ページ～二七ページ）は「『阿弥陀仏よや、おーい、おーい』という呼びかけは、なんと人間らしさに満ちていることか。」「『発心集』と『百因縁集』とは、相当くわしく物語られていくが、いずれも『南無阿弥陀仏と申して行く』のであつて、『阿弥陀仏よや、おーい、おーい。』のような対人的な呼びかけはない。それは、『今昔』の源大夫の個性であり、同時に、『今昔』の作者の個性である。」と述べ、また国東文麿氏（『阿弥陀仏ヨヤ、ヨイ／＼』今昔物語集成立考（増補版））も「『今昔』と『発心集』等との」表現のこういう相違の中の一つ、源大夫が金鼓を頸にかけ、ただひたすらに西に向かつて進みながら呼び続ける声は、『今昔』では「阿弥陀仏ヨヤ、ヨイヨイ（おーい、おーい）。いちずに仏を求めてやまぬ野性的な人間像が、この源大夫の、人間にむかつて呼びかけるように、弥陀を呼ぶ叫びに具現されているといえる。このところ長明発心集と私聚百因縁集では、『南無阿弥陀仏と申して行く』であり、宝物集（九冊本）では、『南無あみだ仏と高声にとなへて行ければ』である。この一語の違いは、人間の扱え方において、『今昔』△源大夫発心譚▽と他のそれを区別する核心の一つといえるかも知れない。」と述べておられる。両氏ともに「今昔」の源大夫の阿弥陀仏への呼びかけに注目しておられる。両氏のこの点へ

の着目は正しく、的を射ている。長明がこの話を採用した時、なぜ「ライ／＼」の呼びかけの形に仕上がったのであろうか。その理由の一つには「今昔」採用の話と「発心集」採用話との伝承系統、あるいは採用源が異なっていた、即ち長明は「今昔」系統の話を採用できなかったことが考えられる。ただしかりに「今昔」系統の話を採用できたとしても、長明がこの部分を訂正しないで掲載したかという疑問である。その理由として一つには話を掲載する時の視点の差がある。両話の話末の評をみると両者とも源大夫が往生したことに関心があつたことは共通する（発心集「功つめる事なければども、一筋に憑み奉る心深ければ、往生する事またかくのごとし」、今昔「必ず極楽ニ往生シタル人ニコソ有ルメレ」）。これ以外に「今昔」は「世ノ末ナルトモ、実ノ心ヲ発セバ此ク貴キ事モ有ル也ケリ、トナム語り伝ヘタルトヤ。」との評から、実の心を発して阿弥陀仏を探し求める過程に力を置く。往生だけに関心があれば呼びかけは不要であろう。他の一つの理由に、前述したように長明が貴族の立場を捨てきれなかつたことが考えられる。そこに長明のよくも悪くも越えられない境界があつたように思う。

四

長明の「心」の問題

藤本徳明氏（笠間叢書「中世仏教説話論」）は、長明の認識の方法として、(一)相対的認識、(二)漸層法的認識、(三)頓挫法的認識の三通りがあることを指摘し（「発心集」における認識の方法、二五三頁）、また「比較の積み重ねによって後者が前者を否定してゆき、

その結果、現世の価値が相対的なものであることを結論する」（我が分に過ぎぬれば望む心なし、一九七頁）方法をとることを述べる。氏の説には私も同意見である。氏の説に従って「方丈記」を読むと、確かに俗世間と対比して隱遁生活の心安さをくり返し述べ、次第に高まりをみせて長明の心を仏道に向かわせ、浄土に指向させる。

それにしても長明はなぜ都の生活や他人のことを反覆してとり上げ、記述しなければならなかつたのであろうか。例えば飯の庵での恐れのない静かな生活を述べるために尊い人の死亡や都の家々の炎上をとり上げ、わが身のためにのみ庵を結ぶことを述べるために世間の人が妻子・眷属のために家を造ることを述べる（「おのづから、ことの便りに都を聞けば、この山にこもり居て後、やむごとなき人のかくれ給へるもあまた聞こゆ。まして、その数ならぬたぐひ、尽してこれを知るべからず。たびたび炎上にほろびたる家、また、いくそばくぞ。ただ飯の庵のみ、のどけくしておそれなし。」以下省略）。「方丈記」前半の災害の記事も都中心である。前述のように本記には源平争乱の扱いはなく、「発心集」でもほとんどとり上げないが、その理由の一つは、長明が執心する社会内の出来事ではなかつたからではないのか。長明は自己や自己の生活を述べるために世間や人のことをくり返し記述するが、なぜそれほど気にしなければならぬのであろうか。最後には「仏の教へ給ふおもむきは、事にふれて執心なかれとなり。」と言ひ、執心から離れるために草庵の楽しみ、閑寂な生活、すべてを否定し去らうとする。それでは世間や人は単なる否定の材料にしか過ぎなかつたのか、あるいは

は単なる表現上の技巧であつたのかというと、そうでもない。前掲の「源家長日記」の一文にもみられるように都の生活、貴族的なものへの執心は強かつたのではなからうか。前記今成氏は長明が「方丈記」執筆時に宗教的に高い次元に達していたと指摘された。私は氏の説に大きな示唆を受けたが、それにしても心の奥から執心が完全に断たれたとは思えない。その執心が「方丈記」の右の一文等に投影したのではなからうか。

「発心集」巻一に乞食僧の話がある。例えば第三「平等供奉、山を離れて異州に趣く事」は叡山の平等供奉が名利にとらわれるわが身を疎ましく思つて山を下り、伊豫国に渡つて乞食して日を送り、往生した話である（古事談等に同話がある）。また第十一「天王寺聖、隱徳の事」は天王寺の瑠璃聖と仏みようという乞食僧の話を、第十二「美作守頭能家に入り来る僧の事」は偽悪の乞食聖の話を紹介する。長明が本集の巻頭近くにこのような話をとり上げた以上は、名利を捨てて徳をかくし、乞食僧のような姿で日を送るのが長明自身にとって一つの目標であり、理想であつたとみてよい。この人達は人々から汚がられ、嫌われようとも、無頓着で恥ずかしがることもしない。長明はこの人達に対して「此れらは、勝れたる後世者の一の有様なり。」（第十）、「実に道心ある人は、かく、我が身の徳を隠さむと、過がをあらはして、責まれん事を恐るるなり。」（第十二）と評し、道心ある人、後世を願う人の眞の姿とする。

それでは実際に長明自身は何の抵抗なく乞食姿になれたらうかという疑問の点が残る。第三の評をみると「今も昔も、実に心を発せる人は、かやうに古郷を離れ、見ず知らぬ処にて、いさぎよく名

利をば捨てて失するなり。菩薩の無生忍を得るすら、もと見たる人の前にては、神通を現はす事難しと云へり。況や、今発せる心はやんごとなけれど、未だ不退の位に至らねば、事にふれて乱れやすし。古郷に住み、知れる人にまじりては、いかでか、一念の妄心おこさざらん。」とあつて、故郷に住み、知人の中にいると心が乱れやすいことを述べる。また「方丈記」の終り近くに「おのづから、都に出でて、身の乞こつがつとなれる事を恥づといへども、帰りてここに居る時は、他の俗塵に馳する事をあはれむ。」と記す一文がある。乞食のような姿で都に出ると恥ずかしいというが、前記「源家長日記」の記述から考えると、これは単なる文章上の技巧ではなく本心のあらわれとみたい。このことから考えると、「発心集」でとり上げた乞食僧は理想の姿であつたにしても、長明自身はなか／＼その境地に到達できなかったのではなからうか。「方丈記」に「仏の教へ給ふおもむきは、事にふれて執心なかれとなり。」とあるが、この一文は目標であつた。到達することを願ひ、努力しながら、結局は到達しきれなかつたのではなからうか。

鴨長明集をみると

「ある聖のすすめにて、百首の歌を厭離穢土欣求浄土によせてよみ侍りし中に、雁を、

しら雲に消えぬばかりぞ夢の世をかりとなく音はおのれのみか

の歌のように、無常をよみこみ、道心を披瀝する歌がある一方、

「ものおもふころ、おさなき子をみて、
そむくべきうき世にまどふ心かな子を思ふ道は哀れなりけり

ものおもひ侍るころ、おさなき子をみて、述懐のころを
奥山のまさきのかづらくり返しゆふともたえじ絶えぬなげきは
あればいとふそむけばしたふ数ならぬ身と心との中ぞゆかしき」
の歌のように、俗世への迷いを絶ちきれぬ心をよんだ歌がある。両
者の心は「方丈記」「発心集」についてもみることが出来る。

「発心集」には「心の師とは成るとも、心を師とする事なかれ。」
の一文を始め、様々の心がとり上げられている。例えば、愚かなる
心、短き心(序)、財を貪る心(巻一第六)、執心(巻一第八)、
色深き心(巻六第十三)、悪心(巻八第九)、不善の心(巻八第
十)等。これらの心は迷いの心で、これらの心に執着していると苦
の原因になり、悪道に落ちる。これらの心を絶ち切らなければなら
ない。一方、世を厭ふ心(巻一第五)、無常を悟れる心(巻一第
六)、勇猛・強盛なる心、懺悔の心(巻三第三)、心をすます(巻
六第九)、深心、信心、実の心(巻七第三)、勇猛精進の心(巻八
第七)、及びくり返し使用される発心、道心、菩提心。これらは理
想の心、目標とすべき心で、これらの心を持つことによって苦から
離れ、心の安定を得、善道に趣くことができる。

「方丈記」でも様々の心の状態をとり上げる。中でも「それ、三
界はただ心一つなり。心もし安からずは、象馬・七珍もよしなく、
宮殿・楼閣も望みなし。」云々の一文は、心の安定、自由の理想が
みられる。ところがなか／＼理想通りに行かず、執着心、煩惱に悩
まされ、苦闘しているのが実情である。この一文に続く「おのづか
ら都に出て、身の乞丐となれる事を」云々には前述のような長明
の心の矛盾の反映が出ているように思う。この心の矛盾、悩みは一

「発心集」にも所々みることが出来る。前記巻一第三の評には「故郷
に住み、知れる人にまじりては、いかでか、一念の妄心おこさざら
む。」とあり、揺れる心を表現する。前記巻一第五「多武峯僧賀上
人、遁世往生の事」の評に「人にまじはる習ひ、高きに随ひて下れ
るを哀れむに付けても、身は他人の物となり、心は恩愛の為につか
はる。これ此の世の苦しみのみに非ず。出離の大きなさばかりな
り。境界を離れんよりほかに、いかにしてか、乱れやすき心をし
づめん。」とある。恩愛の束縛によって心が乱れる状態は「方丈
記」にも同様の記述があるし、前記の歌集にもある。身は境界から
離れたからといって心がはたして完全に安定した状態を得られたか
どうか。

「発心集」の最後に数話、賀茂社、川合社、あるいは本地垂迹関
連の話を掲載する。現世への執着がすっかりなくなつたのならこの
ような話を末尾に持つて来ることはなかつたのではなからうか。周
知のように両社は長明とゆかりが深い。中でも巻八第十二「前兵衛
尉、遁世往生の事」は、前兵衛尉某がうだつの上らないことを歎い
て賀茂社に祈つた。夢に阿弥陀仏を見た。某は「現世のことは前世
の報いによるので神の力が及ばないのを知らせようとしたのか。」
と思つて出家した。そして現世のことはあきらめ、念仏をとなえて
往生した話である。不運が仏道に入るきっかけを作つた点で長明と
境遇が似る。このような話を出して自らの励ましにしたのではない
か。